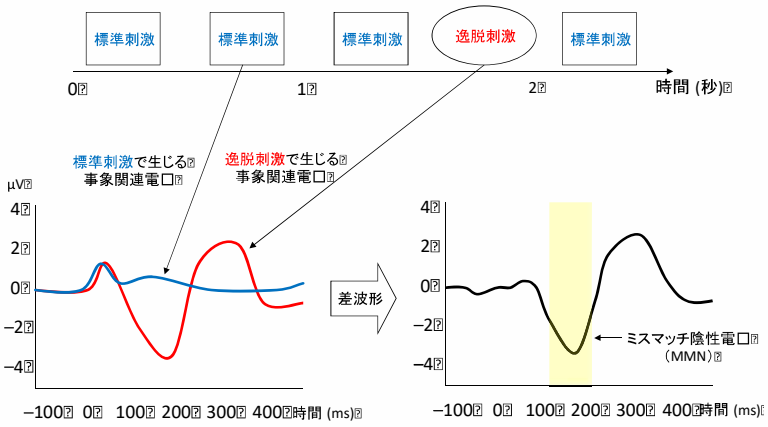
越山　太輔（精神医学）

- 研究内容

統合失調症早期段階を対象とした脳波測定による事象関連電位研究（聴覚性ミスマッチ陰性電位、図1）に取り組んでいます。これまでに統合失調症早期段階でのミスマッチ陰性電位の振幅低下が全般的社会適応レベル低下と関連することを明らかにしました。この結果はミスマッチ陰性電位が統合失調症早期段階の病態の解明や新たな治療法開発に有用なバイオマーカーとなりうることを示しています。



- 関連業績

1. Koshiyama et al. Association between mismatch negativity and global functioning is specific to duration deviance in early stages of psychosis. Schizophr Res 195:378-384, 2018.
2. Nagai et al. Auditory mismatch negativity and P3a in response to duration and frequency changes in the early stages of psychosis. Schizophr. Res. 150:547–554, 2013.

D4 林　宜亨（精神医学）

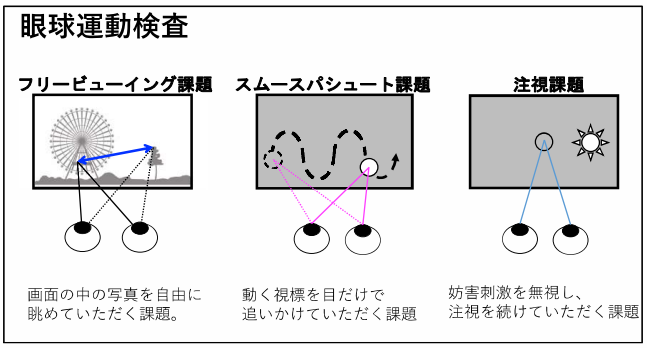
- 思春期の情動・行動の問題の生物学的基盤について研究をしています。現在は主に、social　withdrawal傾向を研究対象としています。

森田　健太郎（精神医学）

研究内容

統合失調症の方の眼球運動特徴や脳画像所見に関連した研究を行っております。

眼球運動特徴などの客観的指標が統合失調症の方の日常生活において、どのような要素と密接に関わるかを明らかにし、将来的には生活の役に立つリハビリテーションツールを開発したいと考えています。



業績

Morita, K., et al. 2017. Eye movement as a biomarker of schizophrenia: Using an integrated eye movement score. Psychiatry Clin. Neurosci. 71, 104–114.

Morita, K., et al. Abnormalities of eye movement are associated with work hours in schizophrenia. Schizophr. Res. in press.

D3　青木　藍（精神医学）

- 研究内容
  - 発展途上国における子供のメンタルヘルスについて研究しています。モンゴル国で、メンタルヘルスのスクリーニングツールの妥当性の検証、スクリーニングツールを用いた疫学的調査や精神医療の効果の検証などを計画しています。モンゴル国における、運動プログラムで子供の学力やメンタルヘルスを含む多面的な健康の改善をはかるランダム化比較試験に参加しています。
- 業績
  - Aoki et al. H. (2012). "The impact of the Great East Japan earthquake on mandatory psychiatric emergency hospitalizations in Tokyo: a retrospective observational study." Transl Psychiatry. 2012 Oct 9;2:e168.
  - Aoki et al. (2016). " Change in newspaper coverage of schizophrenia in Japan over 20-year period." Schizopr Res. 2016 Aug;175(1-3):193-7

D3　金原 明子（精神保健学）

- 研究内容

私は、精神疾患を経験した人のリカバリーのプロセスやリカバリーに役立つサポートについて研究しています。

昨年は、右のような評価手法に関する研究を行いました。今後は、リカバリーに関するインタビュー調査の解析・論文化や、リカバリー支援に関する介入研究を行っていきます。

- 業績
  - Kanehara A et al. The Japanese version of the questionnaire about the process of recovery: development and validity and reliability testing. BMC Psychiatry 17: 360, 2017.
  - Kanehara A et al. Trends in psychological distress and alcoholism after The Great East Japan Earthquake of 2011. SSM Popul Health 2: 807-812, 2016.
  - Kanehara A et al. Psychiatric intervention and repeated admissions to emergency department of drug overdose; a propensity-matched analysis. BJPsych Open 1: 158-163, 2015.
  - Kanehara A et al. Barriers to mental health care in Japan: Results from the World Mental Health Japan Survey. Psychiatry Clin Neurosci 69: 523-533, 2015

主体価値発展・回復過程の評価手法の開発（QPR-J）
（N=197）

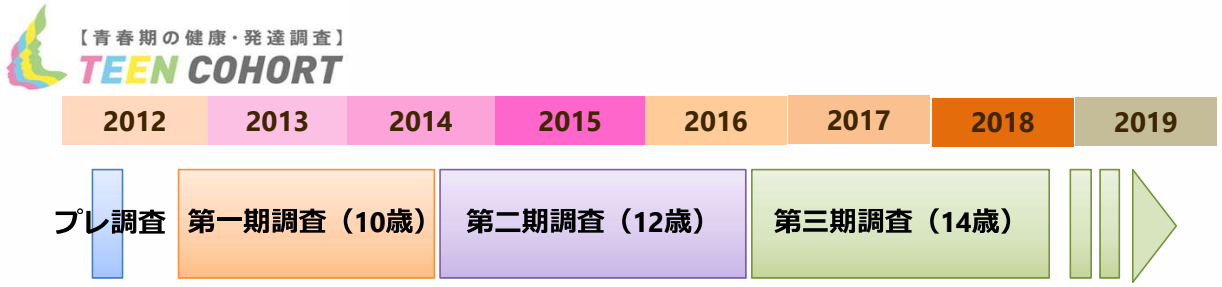
番号	項目	2因子モデル 個人内	2因子モデル 対人
1	自分自身のことを以前よりも良く思える	0.56	
2	人生で思い切って何かをやってみようと思える	0.54	
3	周りの人とプラスになる人間関係を築くことができる	0.61	
4	社会とのつながりがないというよりも社会の一員だと感じている	0.61	
5	自分の意見をちゃんと伝えることができる	0.51	
6	自分の人生には意味があると感じている	0.68	
7	これまでの経験で成長することができた	0.70	
8	これまで自分に起きたことを受け入れて、前に進めるようになった	0.75	
9	もっと元気になりたいと強く思っている	0.27	
10	自分がしたよいことを思い返すことができる	0.68	
11	自分自身のことを以前よりも理解することができるようになった	0.57	
12	自分の生活に責任を持つことができる	0.59	
13	支援機関（就労支援施設・相談支援機関など）を利用することができる	0.42	
18	自分のつらかった経験の意味を見出すことができる	0.64	
19	前向きに人生に取り組むことができる	0.78	
21	自分の様々な生活場面を自分でコントロールできる	0.60	
22	楽しいことをする時間をつくることができる	0.58	
14	精神科での治療のメリット・デメリットを比べて選ぶことができる		0.56
15	自分の経験を通して、以前よりも思いやりのある人間になったと感じる		0.65
16	似たような経験をした人たちと会うと気持ちが楽になる		0.52
17	私の「リカバリー」体験は元気になることに対する周りの人のイメージを変える一助となった		0.73
20	専門職（医師・看護師・心理士・精神保健福祉士など）の見方が、物事の考え方のすべてではないと思う		0.22

確証的因子分析により
①個人内因子17項目
（「自分の人生には意味があると感じている」等）
②対人因子５項目
（「自分の経験を通して、以前よりも思いやりのある人間になったと感じる」等）
という英国同様の因子構造がみられた。

(Kanehara et al, *BMC Psychiatry*, 2017)

D3　森田　正哉（精神医学）

- 研究内容
  - 思春期児童の生活や行動が、その後の発達や精神的健康にどのような影響を与えるかに強い関心があります。現在は思春期児童を対象とした大規模コホート調査に携わり、インターネット依存や社交不安症に関する研究に取り組んでいます。



- 業績
  - 森田正哉 et al. Public speaking fearsとpoor help seekingによる希死念慮リスクの増大. 2016年東大こころのリトリート
  - 森田正哉 et al. 疫学研究発展の長期展望. 精神科 30(3): 227-231, 2017.
  - Sho K et al. Enuresis and hyperactivity-inattention in early adolescence: Findings from a population-based survey in Tokyo (Tokyo Early Adolescence Survey). PloS one: 11 (7), 2016.
  - Fujikawa S et al. Disciplinary slapping is associated with bullying involvement regardless of warm parenting in early adolescence. Journal of adolescence: 68, 2018.

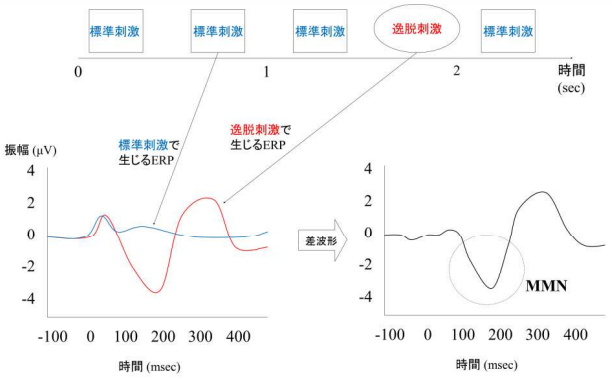
川上　慎太郎（精神医学）

- 研究内容

大うつ病性障害の自覚的イルビーイングと他覚的イルビーイングの脳基盤解析を目的として、うつの自覚指標と他覚指標に一定以上の乖離がある大うつ病性障害患者群と自覚指標と他覚指標に乖離がない大うつ病性障害患者群における構造MRIと安静時機能的MRI（rs-fMRI）の予備解析を行った。構造MRIでは自覚指標と他覚指標の乖離群において左下前頭回で有意な体積低下を認め、他覚的うつ指標と体積低下は正の相関を示した。rs-fMRIでは左外側頭頂皮質と両側中側頭回・後部帯状回・両側前頭極の機能的結合性（Functional Connectivity: FC）低下と左下前頭回・両側縁上回・淡蒼球とのFC上昇を認めた。大うつ病性障害患者のDefault Mode Network（DMN）FC異常は先行研究で示唆されているものの、大うつ病性障害の自覚と他覚に注目したrs-fMRI研究は知り得る限り報告されておらず、DMNの構成部位である左外側頭頂皮質のFC異常が大うつ病性障害の質的差異を示唆する可能性が考えられた。今後はさらに症例数を増やし、うつの自他覚指標の乖離の脳神経基盤を明らかにしていく予定である。

D2　藤岡真生（精神医学）

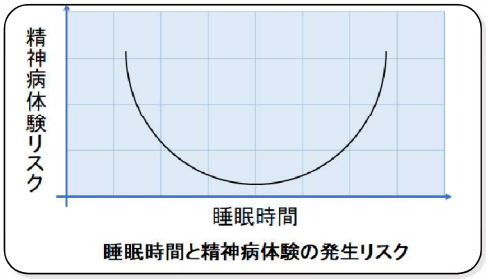
- 研究内容
  - ミスマッチ陰性電位をはじめとする脳波（事象関連電位）研究に取り組んでいます。
  - 精神病ハイリスク者においてミスマッチ陰性電位を用いた予後予測研究、脳神経外科と共同で皮質脳波を用いたミスマッチ陰性電位のconnectivity研究などを行っております。



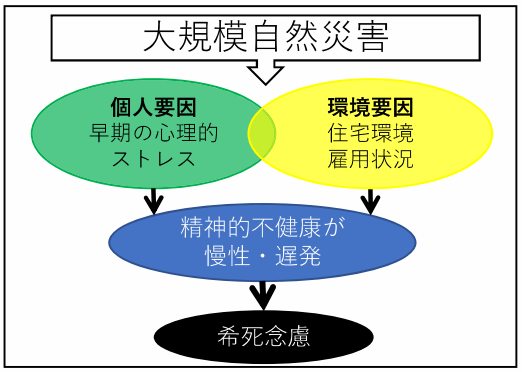
業績

- 藤岡、越山、多田ら. 統合失調症バイオマーカーとしてのミスマッチ陰性電位. 精神医学 59 (9): 817-825, 2017.
- Fujioka M, Koshiyama D, Kirihara K, Tada M, Nagai T, Koike S, Suga M, Araki T, Kasai K: Associations between mismatch negativity and neurocognition and global functioning in early stages of psychosis. 6th BESETO International Conference, Tokyo, November 25, 2017. [Poster]

森島　遼（臨床心理学）



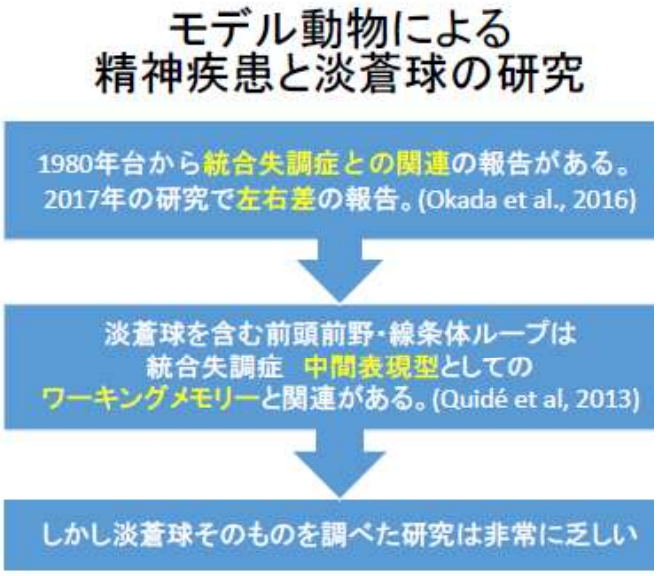
- 研究内容
  - 精神病体験(Psychotic Experiences, PEs)と呼ばれる、一般人口でも体験される閾値下の幻覚・妄想に関心があります。[1,2] 近年、PEsを持つ方の精神や身体的な不健康が報告され、公衆衛生学的な関心が高まっています。[3]
  - 現在は、思春期の睡眠習慣とPEsの関係について研究しています。
  - 大規模自然災後の精神的健康の長期経過や遺伝子異常(22q11.2欠失症候群)の研究などにも携わっています。[4,5]



業績・参考文献

1. Morishima R., Ando S., Kasai K. Reasoning bias and delusional experiences in healthy young adults: Role of autistic tendency. The 1st WPI-IRCN Retreat 2018. Mar 17, 2018. Tokyo, Japan.
2. Morishima R. The U-shaped relationship between data gathering and delusional experiences in late adolescents: an experimental study. 思春期主体価値領域若手・女性の会合宿 2018年7月7-8日
3. Ando S, Nishida A, Usami S, Koike S, Yamasaki S, Kanata S, Fujikawa S, Furukawa TA, Fukuda M, Sawyer SM, Hiraiwa-Hasegawa M, Kasai K. Help-seeking intention for depression in early adolescents: Associated factors and sex differences. J Affect Disord. 2018 Oct 1;238:359-365.
4. Ando S, Kuwabara H, Araki T, Kanehara A, Tanaka S, Morishima R, Kondo S, Kasai K. Mental Health Problems in a Community After the Great East Japan Earthquake in 2011: A Systematic Review. Harv Rev Psychiatry. 2017 Jan/Feb;25(1):15-28.
5. 田宗秀隆、越膳航平、熊倉陽介：22q11.2欠失症候群―精神・身体・知的の3障害の統合的支援. 医学のあゆみ, Vol.261, No.10, 981-987, 2017.

D1　木内　拓（精神医学）



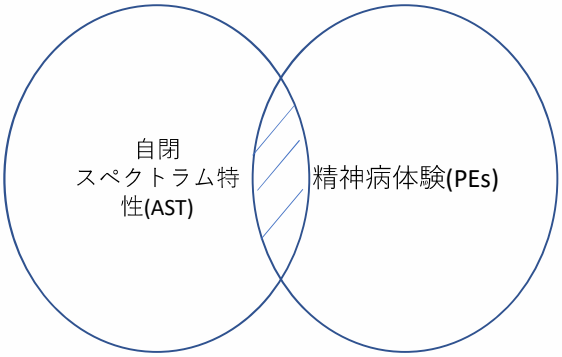
清野 知樹（精神医学）

- 研究内容

統合失調症をもつ人の支援を行う際に、統合失調症と発達障害の併発が疑われる場合は、
それぞれ単独の状態とは異なる対応が必要ではないか、と臨床的な経験から感じています。

しかし現在までに行われている研究では統合失調症と発達障害の併発については横断・後方視的な
研究が多く、十分に調べられてはいないと考えています。

私は前方視的なアプローチが必要と考え、疫学的手法をもとに思春期の発達障害と閾値下の
精神病体験の関連について研究を進めています。



D1　田中　弘子（精神医学）

背景：

甲状腺疾患やステロイドなどの薬剤、内分泌・自己免疫性疾患に伴い、精神症状が出現することは以前から指摘されてきました。しかし、その機序についてはこれまでほとんど調べられてきませんでした。

内容・目的：

中枢神経系のみが甲状腺ホルモン欠乏状態になる変異マウスの作製を進めています。行動解析を通じて表現型を調べるとともに、関与する神経回路～行動を同定することが目的です。

成熟神経細胞特異的に甲状腺ホルモン欠乏状態にした遺伝子改変マウスの行動学・生理学的な表現型の解析

業績

2018年　Depression and Anxiety 日本語版 vol.2 No.3（「不安障害における視床下部-下垂体-甲状腺（HPT）軸の機能：システマティック・レビュー」の項）　編集協力

2016年　小川朝生 編「そうだったんだ！認知症―治療・ケアがうまくいかないのは認知症のせい？（文光堂）」「薬剤による認知機能低下」、「社会資源の導入」の章を分筆執筆

2015年　日本サイコオンコロジー学会 ニューズレター Journal Club 寄稿　「統合失調症患者における、プロラクチン、乳癌リスク、そして抗精神病薬の関連に関する批判的レビュー」

D1　森田　進（精神医学）

- 研究内容
  - 思春期における脳発達、特に性発達との関連に関心があります。
  - 東京ティーンコホートのMRIデータを用いて、性発達と脳構造・機能変化の関係を研究しています。

- 業績
  - Morita et al. A case of interictal dysphoric disorder comorbid with interictal psychosis: Part of the same spectrum or separate entities? Epilepsy & Behavior Case Reports, in press
  - Morita et al. Generation, elimination and weight fluctuations of synapses in the cerebral cortex. Communicative & Integrative Biology 2: 526-9, 2009
  - 森田ら（2015）多彩な体感幻覚症状にsertralineが著効した発作間欠期不快気分障害の1例，第111回精神神経学会学術総会，優秀発表賞